

文化

沈黙に向き合う 沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

(21)

1977年というのは、沖縄各地でほぼ1、2年か
沖縄戦体験者(沖縄戦生存者)、沖縄戦体験記録研究
者にとって特別な年であ
った。
沖縄戦から32年目で戦争
死没者の三十三回忌、ウワ
イスコー(終焼香)が、
つた」と、これまで封印し

「沖縄戦を考える会」発足を伝える1977年
5月16日付琉球新報の記事



「沖縄戦を考える会」発足を伝える1977年5月16日付琉球新報の記事

新たな平和求めて 証言記録や資料収集など 「沖縄戦を考える会」が発足

証言記録や資料収集など

VOA、故

てきたあの忌まわしい凄惨な戦争体験を語り合うことになり、ごく自然に体験の事実確認や記憶の修正が行われていった。もちろん、語れない体験は封印したままである。

劇的变化

戦争死没者の終焼香を境に、沖縄戦体験が忘れ去られるのではないかと懸念さ

で、私にとってはその「終焼香の以前と以後は、劇的変化を痛感する年となった。また、偶然にも75年6月6日に開館した沖縄県立平和祈念資料館が、開館するや批准を受けた。それで実施された展示替え作業(連載20回6月21日)を契機として「沖縄戦を考える会」が発

ウワイスコー

語り始めた体験者

「沖縄戦を考える会」発足

れていたが、それは杞憂にすぎなかった。むしろ、それを機に、戦争体験を語りねばならないという機運が次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

「脅迫を受けていた当時、みんながついていたから次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

「脅迫を受けていた当時、みんながついていたから次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

「脅迫を受けていた当時、みんながついていたから次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

「脅迫を受けていた当時、みんながついていたから次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

「脅迫を受けていた当時、みんながついていたから次第に生まれていったのである。その「空気の変化」は、沖縄戦の聞き取り調査の結果を新聞に載せたこと

うと思えたからである。この動きは、マスコミも注目したようである。『琉球新報』1977年5月16日(朝刊)は、第2社会面トップで、「沖縄戦を考

「沖縄戦の真の意味を追究し、平和希求の新たな一

「総会に先立ち、まず『報

「活動方針は①調査研究